

七部集大鏡

序

中村俊定文庫

文庫 18

999

!

2 3 4 4 5 6 6 7 7 8 8 9 9 10 10 11 11 12 12 13 13 14 14 15 15 16 16 17 17 18 18 19 19 20 20



月院社何九撰釋

俳諧 七部大鏡

書肆

松山堂藏版



冬乃日

初懷紙

春乃日



七部集六鑑序



芭蕉翁七部集。其言脫塵  
凡其句二高尚。後人為之  
注釋者。凡四十七家。彼此  
出入。精麁相半。未得其髓  
矣。翁居則一瓢之米自析  
之。出則一挑之袂。親搭之  
。嘯月嘲風。每所住着。所謂  
幽人之貞者歟。宜矣。淺近  
凡俗之士。不能究其意也。  
科野何丸。學公羽之正風者  
也。冀思研精。七年於茲。博



搜故事。遍檢古書。為之集  
解。名曰七部大鑑。其意蓋  
在於懸明鏡以照四十七  
家之妍媸云。文化六年己巳  
秋九月。書于科野吉田行次

江戸 鵬齋老人識

此 鑑 七 部 年 未 小

注 釋 を 加 へ ず

鑑 と ち づ け 序 文

を ち づ け せ ぬ 信 濃 の



何れおちかたきるに  
おのこもめふもの  
とくきも本了れは  
辞さうせんにやい

言はひらぬ女ら  
你切知しんぞ  
そのよき  
きくもはる色











古くは人々を以て其の徳を以て  
其の徳を以て其の徳を以て

比華一火里守



古人其の徳を以て其の徳を以て  
其の徳を以て其の徳を以て  
其の徳を以て其の徳を以て  
其の徳を以て其の徳を以て  
其の徳を以て其の徳を以て



器の大小一々  
了也けつ稼磨のた  
る家少や志物め社  
園志何丸地力全  
心成又もて心一  
なる

鍛錬一多の心を  
大鏡と物づく  
了れ皆る秋毫  
心かへし  
心系し



















あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心

秋の風情

あはれなる御心



四規とては鏡ももて  
てもたぬおのこし  
な一ゆゑに神心  
千里のあはれなき  
あはれなる御心  
あはれなる御心  
あはれなる御心



かゝるに成るる業は  
いかに教へたるに  
なするに業は  
家々かゝるに成る  
後世に定ぬ出業を  
子望の成るに成る  
何れも成るに成る  
年

この成るに成るに  
金令の成るに成る  
まゝの成るに成る  
えは成るに成るに  
とるに成るに成る  
成るに成るに成る  
かゝるに成るに成る  
かゝるに成るに成る



の玉の山らのめり年々  
新くしつ後能くもくはめり  
をかくの神よりけり  
中々もくもくはめり  
くく通くは者何れせり  
あきくく

その中 春 翠の鳥 獲物



昔くく書籍の海をくく  
玉も能く少くは中くも向秀くは  
季のくく源氏其功くく  
友何れは世に在り能くく  
能くく千里をくく  
年々此くく魂をくく



書子服をばけしし古蹟々々免子田園を  
安らむるに強き多きものゆへに今や  
梓よちりそめ世よ公よせんしんり  
流るる此大鏡天下よ出るる  
事しんりしんりしんりしんりしんりしんり  
舊門よおふしの風出一度きききききき  
て多きとて龍門のん世きききききき

流妙に佳境よも入ぬ海々のえ縁  
其昔もや餅よ書すは梅のえと  
以ひ出るる嬉しめりて悠の和及清海  
多かたはる事もゆめゆめゆめゆめゆめ  
志き人のぬかめと世無きものゆへに  
今凡る事しんりしんりしんりしんりしんり  
えんりしんりしんりしんりしんりしんり







の山も何れもあつた  
あつた山向の両端より  
てそつた山向の両端より  
たつた山向の両端より  
あつた山向の両端より  
正

一山向の両端より  
あつた山向の両端より  
また山向の両端より  
の山向の両端より  
あつた山向の両端より



子河のやのゆりねの母生  
まむね〜る

しこ老漢

9



信の何のぬ〜る  
まむねを交ぬき  
尾淵のぬ〜る  
わが我腐蘇のぬ〜る



ふしの叙をさるる  
陣の許多人席置あり  
今スレ何をおい大せ  
は〜〜由々容貌平  
觀尔二年七の敷音声

其の物心又蕉翁の七部  
乃ち〜〜を既  
上木も集註け及の  
金匱とす大人世の人  
の感〜〜馬



備急入功  
 冠の書  
 冠の書

北律雪庵北元



引用書目

法華經 法苑珠林 悲華經 報恩經 十王經  
 孟蘭盆經 傳灯錄 梵網經 文殊經 般若經  
 高僧傳 因果經 知度論 明心法鑑 諸乘法數  
 千手經 僧史略 造教經 涅槃經 禪林類聚  
 史記 前後漢書 晉書 南史 宋書 周書  
 唐書 宋史 通鑑紀事 素書 廣雅 戰國策  
 六韜 易經 書經 詩經 禮記 春秋 左傳  
 春秋元命通 史記正義 易候 五經通義  
 詩經正義 曲禮 周禮全經 論語 孟子 晉子  
 列子 莊子 抱朴子 淮南子 五雜俎 爾雅  
 酉陽雜俎 五車韻瑞 白虎通 琴操 荀子  
 風俗通 羯鞞錄 孔子家語 太平廣記 魏豹傳



典籍并覽 太平御覽 荆楚歲時記 事物紀原  
車林廣記 車文類聚 類書纂要 漢武故事  
前漢外戚傳 漢武內傳 車文後集 樂書  
翰墨全書 書言故事 寶典 雜五行書  
漢車始 杜氏通典 陳藏器 對類大全 唐令  
弁樂解 孫盛雅記 綿繡萬花谷 裘服小記  
冷齋夜話 續齋諧記 養溪筆談 風土記  
焦氏筆乘 容齋隨筆 軒轅本記 春明退朝錄  
太一金鏡經 祖庭事苑 三秦記 四部稿選  
黃帝內傳 韓文 柳文 潛確類書 占書  
十節記 尋到源頭 玉燭寶典 論衡論幽吟錄  
唐韻 溫公詩話 瑯琊代醉 拾遺記 教坊記  
歸田錄 擊蒙要略 帝城景物略 古今原始  
通曆 義楚六帖 學齋佔畢 出曜經 名義集

繫辭 通鑑齋記 寒山詩集 山海經 通典  
樂府雜錄 遊仙窟 品類事實 新論 論衡  
太白陰經 魏略 楚辭 皇圖要記 蜀王本記  
帝王世記 墨子 桓子新論 至中記 古史考  
物理論 三禮圖 大戴禮 古今注 海錄碎事  
毛詩 仙傳拾遺 管子 世風記 月令廣義  
歲華紀曆 古樂府 漢雜事 講德論 通論  
漢武策 毛詩傳義 涉世錄 玄妙內篇  
諸子娘孃 東觀漢記 秦書 顏子家訓  
笑苑類彙 通載 格物記 困元遺事 西京雜記  
晉朝雜記 南越志 統晉陽秋 輟耕錄 洞冥記  
退耕錄 說苑 孫氏世錄 異苑 世說新語補  
養生論 蒙求 成語考 彙蟲海集 統世說  
格物叢話 陸佃埤雅 鶴林玉露 夢言故事



懸珠詩格 小說 搜神記 神異經 錢神論  
小學 神龜論 質龜論 畧錄 劉向五行傳  
相鶴經 茶邑獨斷 仇池墨記 集林大斗記  
大明一統志 華陽風俗記 禽經 獸經 博物志  
運斗樞 天文志 韻府 龐居士語錄 韻會  
說文 句略 圓棧活法 三才圖會 造化論  
神仙傳 高士傳 隱逸傳 列仙傳 才上傳  
文選 古文 朝詩外傳 本草小品方 病源論  
三體詩 錦繡段 杜律 白氏文集 李太白詩集  
山谷詩集 東坡詩集 朱子治錄 詩經西風  
名物奇解 沈存中華談 溫故日錄 四六文章  
東齋隨筆 江湖風月集 石林詩話 詩人玉屑  
萃巖經 僧祇律 金剛經 德義經 朝野群載  
舊事紀 文德實錄 故事紀 日本紀 類聚因史

神皇正統記 本朝通鑑 諸社振元記 日本史  
藤原系圖 和漢朗詠集 延喜式 續日本紀  
本朝通史 本朝列仙傳 藤原抄 倭姬世記 人史  
杖束搜神記 日本後紀 清輔奧義抄 職員令  
神社考 菅家御集 清輔雜談集 和歌色葉抄  
元亨新書 中右記 名月抄 教氏要覽 家禮  
万葉集 資道什物記 本朝月令 新撰万葉  
古今集 八雲御抄 後拾遺集 統古今集 江記  
後撰集 新古今集 統拾遺集 新勅撰集  
新後撰集 金葉集 統後撰集 千載集 詞苑集  
統子載集 統後拾遺集 新後拾遺集 玉葉集  
風雅集 新統古今集 拾玉集 小町家集 賴政家集  
山家集 西行家集 俊賴家集 夫木集 伊勢家集  
信明家集 各寄集 堀川百首 堀川後百首



舉白集 藤川百首 新明題集 六百番歌合  
曾我物語 十寸流 埃囊抄 古今榮雅抄  
久安百首 正風傳抄 悅目抄 扣名抄 六帖  
仙覺万葉抄 古依日記 清輔袋草紙 行取物語  
源氏物語 伊勢物語 落穴窪物語 大和物語  
采花物語 世施物語 統世繼物語 任吉物語  
平家物語 今昔物語 狂雲集 十六夜日記  
梁塵愚抄 耳底記 宇治拾遺 長明發心集  
撰集抄 徒然草 江家次第 長明道之記  
無名抄 公事根元 長明方丈記 年中行事  
長明海道記 春乃曙 河海抄 長明伊勢之記  
新撰髓腦 花鳥余情 拾芥抄 源平盛衰記  
清少納言 井蛙抄 江源武藏 日本異記  
文獻通考 根本律 要言故事 徽吉記物語

簾中抄 文章軌軌 春雨抄 遠嶋御百首  
歌道鈞物 曉華抄 扶桑略記 本朝列女傳  
羅山集 天文雜記 北條五代記 和漢合運  
善隣國宝記 草山集 下字集 長明文字錄  
圖繪寶鑑 古事談 公卿補任 古今著聞集  
慄風藻 統古事談 一円雜談集 大成經  
本朝年鑑 和漢三才圖會 十訓抄 東西夜話  
千五百番歌合 隱逸傳 統隱逸傳 民家宣忌錄  
太平記 旧遺考錄 女郎苑物語 源治秘決  
枕花甚奈系 江談抄 本朝醫考 日本歌名  
林采秘抄 贈餘雜錄 雲谷雜詠 雲霞集  
行狀記 南浦文集 和歌八重垣 要華傳 海人藻芥  
掌中曆 大和本草 高名錄 武用弁略 兵具俎談  
篁之記 言塵抄 醒眠記 東鑑 兼燭譚 歌枕



全浙兵制 新田軍記 卷懷食鏡 隨園記 一休咄  
 後太平記 名物六帖 素堂家集 竹齋物語 大鏡  
 大原十句 藻鑑彙 武備志 古刀銘鑑 和事始 畫史  
 算學啓蒙 年山紀聞 砂石集 京羽二室 東海記  
 詩經抄風 三國語林 名物弁解 文識篇 退私錄  
 沈存中華談 溫故日錄 東林法華 石林詩話  
 江湖風月集 詩人玉屑 四六文章 貞觀式 和字正鑑鈔  
 畸人傳 玉海抄 玉系記 養生論 金剛經 萃叢經  
 北山抄 世語回音 吳竹集 三餘抄 東園紀行 保元記  
 康富記 怪異弁決 誓言教 古醒集 食物本草  
 筑波回音 國史實錄 行厨集 神名帳 仇物誌  
 北条盛衰記 漢語抄 西行伏集  
 此外為欲連排の書目少くはと只ともよと之行  
 以事八略一二年

芭蕉公羽俳諧口訣

或云北枝傳  
或云此風傳

格不入て格を去るゝをとて格不入をり時を  
 邪語よまゝ格不入格を出てけりめて自在を  
 得る一 詩歌文集を味はれて心を向上に  
 一路よあゝひ作をて曰海よめらるす巻一  
 子年不易一時流り 他のれ句を彩色の  
 味よく我のれ句を墨絵の味よくす一 格入  
 ちまてまゝ彩色るきよもあゝひ心他のよう  
 ちりてまゝひ志をちを第一とす 名人を地を  
 よく潤る一 一よおよまてをあやみ手取ま  
 妙あり 上巻の流よきところよ面白あり  
 等類例第一吟味す巻一 古今れ撰集よ  
 眼をくらす巻一 我のれ風流をまよふ人











を述る此并  
続さるみのを題書ふ別巻を任して意蒙の  
後覽ふ流に

### 題号釋論

愚考凡教号を立らふ五重の義あり一曰名  
二曰體三曰宗四曰用五曰教なり此義ふらるる  
と考て解する小終く、立らふは誤多し  
一 五の曰五教仙并追加の表合ふいづるを以て  
をる此卷改らるる此體取らるるゆゑは則  
體よりりて号するなり 體を他礼之切指し  
亦曰身なり  
一 初懐紙をよま号する一をを用るる用る余共  
之切ツカフちなりモキユルなり説文曰用る可施行ト云

一 書此日名此は山國  
一 曠野を名なり名を弥成之切号ルあり  
又曰才ホイ あり此集や花を月雪并  
新名を常名所古跡人名行なり此  
宗體守氏貞室西武宗因玄旨般齋  
その外他流の法書よいづるを以てことふ  
極りる事、廣原よ比して名目する教号  
なり曠野を廣くあり東西を廣くと云南北  
を長と云曠野を廣くありと云ふ  
全侍夫木集よ樹ふての撰集なるまて  
日平の地形を以て号する此教号なり  
夫木集なる本名杖葉集なるを以て  
て篇と冠を取て夫木と号する之  
その夫木集よなりての篇集なるは



技業此地の形を以て記するなり肥前長門  
大坂長門越後長門信列長沼都る南北一  
き記するなり廣島廣瀬廣田越前廣と以  
字に附する記を皆東西一廣しと云る下  
技業則東西一廣し故に曠野と云る題  
あり

附て云負おとわけて改るれ記を彼夫木  
集中上古よりその時代よりして万葉  
古今以下に撰集より凡そを悉くあつめ  
又授て記する歎号するなり曠野も又代  
集より述或る止風よ叶ふを悉くひ  
ろひあつめて記仙と云ふの集れ余なる  
を負おとるあ号しして名あり  
一 瓢を右ふれりして名あり此集を

大津に称碩の篇集る述ハ彼に湖の瓢  
を本として記すなり此号するなり於集の序  
文に注釈し委し一述ハ略す

一 稗叢と宗あり宗と祖冬之切徹あり又曰  
流派の出る処是と宗と云夫稗叢と蒼雲  
隋誓と居れ故に巻改の一句を以て記号  
何流派何派何宗と云ふ等し於稗叢の文章  
に漢文よ委し

一 炭俵を教るなり教る居孝之切令あり  
誨るなりサツクルなりニキヒクあり祖翁の獨  
言を以て居てその後号する故に編を  
教るなり歌集しくを集れ序文に論す  
一 来者此面此五義を鑑とすむハ  
おそらくもあやうらまうむ子万代書籍



五巻のあはれを告ぐ



狂雷堂ういづあし事よまはるかにまじりて  
先学本のふとあはれにまじりて  
是を物のまじりてあはれに  
よく仔細せんまじりてあはれに  
なるは擗もまじりてあはれに  
まじりてあはれにまじりてあはれに  
まじりてあはれにまじりてあはれに







